

# 東海の古代

第238号 2020年6月

会長 : 竹内 強  
編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : furutashigaku\_tokai@yahoo.co.jp  
HP : http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm

## 34年遡上説の功罪 その2

名古屋市 石田泉城

### 1 持統紀の34年遡上説は成り立たない

「34年遡上説の功罪 その1」では、先師古田武彦及び正木裕氏の34年遡上説について成立しないことを示しました。

34年遡上の古田説は、『日本書紀』の持統紀にある吉野行幸が、まず第一に大和ではなく九州の吉野であったと仮定し、第二に『日本書紀』の月と日干支を正しいと仮定し、そして第三に吉野行幸が白村江の記事と関連していると仮定した、この3点を前提にしています。

また、正木裕氏は、この古田説をもとにして31回の吉野行幸が「セットもの」とであるとされます。

ところが、持統紀の「吉野行幸」記事を34年前に遡上させて検証すると、31件の約半数の日干支が当てはまりません。1件でも当てはまらなければ論理は成立しません。それが半数もあるのですから、誰が検証しても持統紀の34年遡上説は成立しません。

### 2 天武紀の34年遡上説も成り立たない

さて、今回は『天武九年の「病したまふ天皇」』（古田史学会報94号、2009年）をとりあげます。この論考において、正木裕氏は次の『日本書紀』の天武九年（680年）十一月の記事は、九州王朝の史書からの盗用とされ、この天皇・皇后の病氣平癒記事は、34年遡上した命長七年（646年）の記事とされます。

・（天武九年十一月壬申朔）癸未、皇后體不豫。則爲皇后誓願之、初興藥師寺、仍度一百僧。由是、得安平。

（天武9年11月）12日、皇后は体を病む。すぐに皇后のため誓願し初めて薬師寺を興す。よりにて百人の僧を出家させ、これゆえに平安を得る。

・丁酉、天皇病之。因以度一百僧、俄而愈之。

26日、天皇は病氣になり、よりにて百人の僧を出家させると俄に癒える。

この2つの記事は、十一月に皇后と天皇が相次いで病になり、皇后の平癒祈願のため薬

師寺を建て、それぞれ百人の僧侶を得度（出家の儀式）させたところ、天皇皇后共に病が癒えたという意味です。

この説の前提として、『日本書紀』の持統紀の中に九州王朝の史書から盗用した記事があるとされます。一般的には、九州王朝の史書の概念が理解しにくいところでしょう。九州王朝の史書から盗用されたとする考えの根底に、この記事を34年遡上させた646年が命長七年であり、この命長は古代逸年号いわゆる九州年号であるので、ここに記された天皇を九州王朝の王者であると理解するわけです。

そこで、この記事は、九州王朝の史書から盗用しており34年遡上したものとします。

34年遡上説の論理展開は、天武九年十一月の日干支である「癸未」や「丁酉」が当月に存在しないことと、その日干支を白村江の戦い以前に求めたときに存在していることだったはずです。

ところが、この天武九年十一月には「癸未」も「丁酉」も存在します。したがって、34年遡上する論拠そのものがありません。その上に、天武九年の680年から34年遡上させた大化二年（646年）十一月においても「癸未」は存在せず、これも34年遡上説の論理から外れています。

680年	壬申朔【 1】	判定	646年	己丑朔【 1】	判定
天武九年十一月	癸未【12】	×	大化二年十一月	癸未【10月25日】	×
	丁酉【26】	×		丁酉【11月9日】	○

そもそも、34年遡上させる理屈は、該当の月の日干支が存在しないので、白村江の戦い以前にその日干支を求めると34年前の同月にその日干支が存在していることでした。

その理屈が天武九年十一月も、34年遡上した大化二年十一月もともに当てはまらないのでは、34年遡上の意味が失われます。白村江の戦い以前に求める根拠がありません。

したがって、正木説は根本的に成立しません。

なお、34年前の大化二年（646年）には、孝徳天皇は健在であり、天皇の病とは全く関係がありません。

### 3 利歌弥多弗利は病に臥していたのか

古田説の場合は、白村江の戦いの前に、1年を通じて佐賀の吉野にある軍事基地の視察や軍事相談に出かけたとするので、いささか強引ではありますが多くの「吉野行幸」に意味があります。これに対して、正木説では、天皇・皇后の病氣平癒と「吉野行幸」とは関係なく、古田説の34年遡上とは全く異質です。

根拠らしきものは、天武の記事を「命長」という年号と病氣平癒がそれらしいとして結びつけたところですが、それは正木氏自らが仮定としたものですから根拠にするのは不適切です。次のとおり記されます。

**利歌弥多弗利は永く病に臥していたのだろう。「命長」という九州年号に、時の天子の病氣平癒の願いが込められていると見るのは考えすぎか。**

「利歌弥多弗利は永く病に臥していた」のも「時の天子の病氣平癒の願いが込められている」のも明らかに考えすぎと思いますが、ここで確認すべき問題は、「命長」を「利歌弥多弗利は永く病に臥していた」に結びつけたのは、正木裕氏自身であるということです。

それを論拠にするのは本末転倒です。

#### 4 「聖徳太子の手紙」を否定する根拠はあるのか

さて、正木説では、『善光寺縁起集註』の「聖徳太子の手紙」にある九州年号の「命長七年」に注目し、九州王朝の王者が重病になったため善光寺如来に請願したと解します。先に紹介した記述と重複する部分もありますが、『天武九年の「病したまふ天皇」』の冒頭には、次のとおり記されています。

命長七年（六四六）という年次等から、手紙は聖徳太子ではなく、九州王朝の高位の人物が善光寺如来に宛てた手紙と考えられる。この「命長」文書は、法興三二年（六二二）に没した多利思北孤の次代の利歌弥多弗利のものである。死期迫る利歌弥多弗利が「我が濟度を助けたまえ」と願う文であり、「病状とみに悪化」「命、旦夕」の倭王の姿を見る。利歌弥多弗利は永く病に臥していたのだろう。「命長」という九州年号に、時の天子の病氣平癒の願いが込められていると見るのは考えすぎか。

善光寺は、いくつか現存する善光寺縁起類に記されている手紙を「聖徳太子の手紙」であるとしています。これに対して、正木説では「命長七年（六四六）という年次等から、手紙は聖徳太子ではなく」として、聖徳太子の手紙であることを否定されています。

『善光寺縁起』の該当の手紙には、「斑鳩厩戸勝鬘上」や「斑鳩宮厩戸上」の署名がありますので、一般的には、善光寺が主張されるように、この署名は聖徳太子のものとするのが妥当と思われます。この手紙が聖徳太子のものではないと否定するには、「斑鳩厩戸勝鬘上」や「斑鳩宮厩戸上」が聖徳太子の署名ではない根拠を示す必要があります。正木氏の論考ではそれが一切示されていません。

聖徳太子は、斑鳩宮に居して厩戸皇子と呼ばれていますから、私は、これらの署名は聖徳太子と考えるのが妥当だと思います。

#### 5 善光寺の手紙の差出人は九州王朝の人物か。

続いて冒頭の説明には、「九州王朝の高位の人物が善光寺如来に宛てた手紙と考えられる。」とされます。なぜ、九州王朝の高位の人物による手紙なのか、これも根拠が示されていません。

確かに、この手紙には、いわゆる九州年号の「命長七年」が記されています。しかし、手紙の日付に九州年号が使用されているからといって、その差出人が九州王朝の高位の人物であると断定することはできないでしょう。九州王朝の高位の人物でなくても「命長」年号を使用することはありうるからです。

つまり「斑鳩厩戸勝鬘上」の名を九州王朝に関わる人物名と断定するのは拙速です。

#### 6 利歌弥多弗利と聖徳太子は同一人物か

「斑鳩厩戸勝鬘上」の人物について、正木氏は「法興三二年（六二二）に没した多利思北孤の次代の利歌弥多弗利のものである。」とされます。しかし、この手紙には「利歌弥多弗利」に関わる署名は一切ありません。

正木説は、古賀達也著の『「君が代」の「君」は誰か』（古田史学会報34号、1999年）の考えに追従していますので、その論考を確認したところ、次のとおり記されています。

その点、倭国王子を利歌弥多弗利とした場合、即位は仁王元年（六二三）、四七歳のときであり、没年とともに自然である。また、立太子を多利思北孤即位年（五八九）のこととすると、十三歳のときであり、その後多利思北孤没年までの三四年間を太子として在位したことになり、その間の活躍が、後に聖徳太子の事績として近畿天皇家側に盗用されたと考えても、納得できるところではあるまいか。

これは全く理解できない内容です。

倭国王子の事績を聖徳太子の事績として書記に記されているという考えに立ち、聖徳太子に倭国王子の利歌弥多弗利を模して、589年に立太子し623年に即位したと示されます。

しかし、聖徳太子は、593年に立太子して摂政となり622年には亡くなっていますので、589年を立太子として即位を623年とする古賀氏の仮説は理解しがたいです。

聖徳太子の事績だけを採用して立太子や死亡の時期を全く無視する説が論理的とは思えません。自らに都合のいいように記事を取捨選択すれば論理はどうにでもなってしまう、自らの好きな結論に導けるでしょう。

また、利歌弥多弗利が623年に天子になったとするならば、聖徳太子が天子にはならなかった書記の記述と相反します。

しかも、古賀説では、問題とする「命長七年」の646年には、利歌弥多弗利は70歳になっていることになり、高齢の天子が病氣平癒を願うことがあっていけないとはいきませんが、一般的には十分に全うしていると考えられます。さらに、その天子が「斑鳩厩戸勝鬘上」と名乗っていたということになりますが、九州王朝の天子が「斑鳩宮」や「厩戸」や「勝鬘」に関係している根拠はなく利歌弥多弗利を聖徳太子に模すのは無理があります。

## 7 「斑鳩厩戸勝鬘上」は女性の名か。

ところで、「斑鳩厩戸勝鬘上」の聖徳太子否定説の一つとして、この署名である「勝鬘<sup>しょうまんぎょう</sup>経」は勝鬘夫人にちなんだものだから、その「勝鬘」を含んでいる「斑鳩厩戸勝鬘上」は女性の名であるとする意見があります。女性であれば聖徳太子の可能性はゼロでしょう。しかし女性説はあたりません。

勝鬘経は、仏道を説く古くからの經典であるので、聖徳太子の書とされる『勝鬘経義疏』にも使われており、聖徳太子の名に「勝鬘」が含まれているのはむしろ自然であり、これをもって女性とするのは短絡的です。

実際に、女性の名を男性に使用している例はあります。たとえば、新羅の第27代の王は、善徳女王であり「善徳」は女性に付けられた名ですが、蘇我馬子の長男の名は、同じく「善徳」です。女性の名が男性に付けられています。したがって、「斑鳩厩戸勝鬘上」の「勝鬘」は勝鬘夫人の女性の名であるから「斑鳩厩戸勝鬘上」が女性であるとするのはまったく妥当性を欠くものです。

## 8 『善光寺縁起集註』

次に、正木説によれば、『善光寺縁起集註』に載せられた「聖徳太子の手紙」は、九州王朝の王者が重病になったために善光寺如来に請願したとされます。

これを検証します。

善光寺によれば、552年に百済の聖明王から献上された一光三尊阿弥陀如来像が廃仏派の物部氏により難波の堀江に投じられたものを信濃の本田善光がすくい上げ招来し、皇極天皇の発願により642年に善光寺が創建されました。善光寺創建前の推古天皇十年(602年)には、長野県飯田市座光寺にある元善光寺(座光寺、善光の自宅)にありました。

この善光寺縁起には数本があり多少記述内容が異なります。

このうち正木説は、江戸時代に書かれた『善光寺縁起集註』の手紙を対象にします。『善光寺縁起集註』には古代逸年号が数多く記されています。

これを載せる国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/952824/145?toc0opened=1>) の『大日本仏教全書 第120巻 寺誌叢書 第4』の『善光寺縁起集註六巻/280p～361p』(62頁、175コマ)には次のとおり、聖徳太子(斑鳩厩戸勝鬘上)からとされる手紙があり、「命長七年丙子」が記されています。

推古二十四丙子歲。聖德太子爲祖王欽明天皇追孝。一  
七日念佛修行訖。而上于當山如來前御書文曰。

御使 黒木 臣

名號稱揚七日已 此斯爲報廣大恩  
仰願、本師彌陀尊 助我濟度常護念

命長七年丙子二月十三日

進上 本師如來寶前

斑鳩厩戸勝鬘上

則善光拜受副于筆硯白紙。備于帳內。即時御返簡。儼  
然而有帳前其文曰。

一念稱揚無息留 何況七日大功德 我待衆生心無

間 汝能濟度豈不護

是如來之御眞筆也。今猶在大和國法隆寺也。誠未

曾有哉。

二月二十三日 善光上

上宮救世大聖

太子傳曰。令居宮南。故名上宮太子也。

如來尊詠

待賀彌天南計久止告與皆人仁。何於何都天急加佐留

覽

六二

推古二十四丙子歲、聖德太子為祖王欽明天皇追孝、一七日念佛修行訖、而上于當山如來前御書文曰

御使黒木臣

名號稱揚七日已 此斯爲報廣大恩  
仰願、本師彌陀尊 助我濟度常護念

命長七年丙子二月十三日

進上 本師如來寶前

斑鳩厩戸勝鬘上

『善光寺縁起集註』の関連部分について、私の理解は次のとおりです。

まず、手紙の前に「推古二十四丙子歲、聖德太子為祖王欽明天皇追孝、一七日念佛修行訖、」とあり、推古天皇二十四年（616年）に聖德太子が欽明天皇の追孝（死んだ祖先を供養して孝道を尽くすこと）のために念仏修行をおこなったとあります。続けて「而上于當山如來前御書文曰」とあり、当山の如來の前に御書文を上げて曰うとあります。

その次に手紙があり、聖德太子は7日間にわたって阿彌陀様の名号を唱えて善光寺に進上するとあり「助我濟度」とあります。「濟度」とは、「我」を困ったり苦しんでいる境遇から救い彼岸へ導くことですので、聖德太子が行う救済を助けるように願う手紙です。

いずれにしても九州王朝の王者が重病になったためとは手紙のどこにも記されていません。

先にも示しましたがこの手紙には、古代逸年号の「命長」が記されており、この「命長七年」に注目すれば、その年代は、西暦646年になります。

というのも『續群書類従卷』第八百十四に掲載されている『善光寺縁起』第三には次の記述があります。

四十一年申天豊財重日是足姫天皇號白居宮。即皇極事。御治天命長三壬寅如夾御託宣言

(百六十九頁)

これは、推古天皇四十一年のことで、「命長三壬寅」は「命長三(年)壬寅」のことであり、壬寅は642年にあたります。

**次年皇極天皇御宇命長四年癸卯本田善光嫡男本次善佐倏然閉眼伏死** (百七十三頁)

ここには、「命長四年癸卯」とあり、癸卯は643年です。

とすると命長三年、四年がそれぞれ642年、643年となりますから、命長七年は646年にあたるのです。

ところが、この手紙では「命長七年」とともに年干支の「丙子」が記され、命長七年は丙子の年にあたると記されています。丙子の年は、616年(または60順後の676年)であり、命長七年の646年とは合致しません。

もし、命長七年の646年が正しいとすると、丙子は、丙子と文字が似ている丙午(646年)の誤りと考えれば、命長七年と一致します。このため正木説においても「命長七年丙子」を「命長七年丙午」の誤りとします。( )書きで次のとおり記されています。

**(命長七年丙子は正しくは丙午で、聖徳太子の在位期に合わせ丙子六一六年に書き換えられたか)**

命長七年は646年で丙子は616年ですので、本来丙午であったものを「聖徳太子の在位期」(593~622年)に合うようにするため、正木氏が「丙子六一六年に書き換えられたか」とされるのは理解できます。

ただ、私は古田武彦の教えに従い、文字が似ているから原文の文字を改変するという考えは、よほどの根拠がないと認められないとする立場です。この手紙の前には「推古二十四丙子歳」(616年)の記述があります。この手紙の年干支「丙子」は、これと同一です。

であるならば、手紙の「丙子」の誤りではなく「命長七年」の誤りの可能性も想定しなければなりません。論理の平等性から「命長七年丙子」の「命長」が正しく「丙子」が間違っているとして一方的に解釈してはならないと思います。

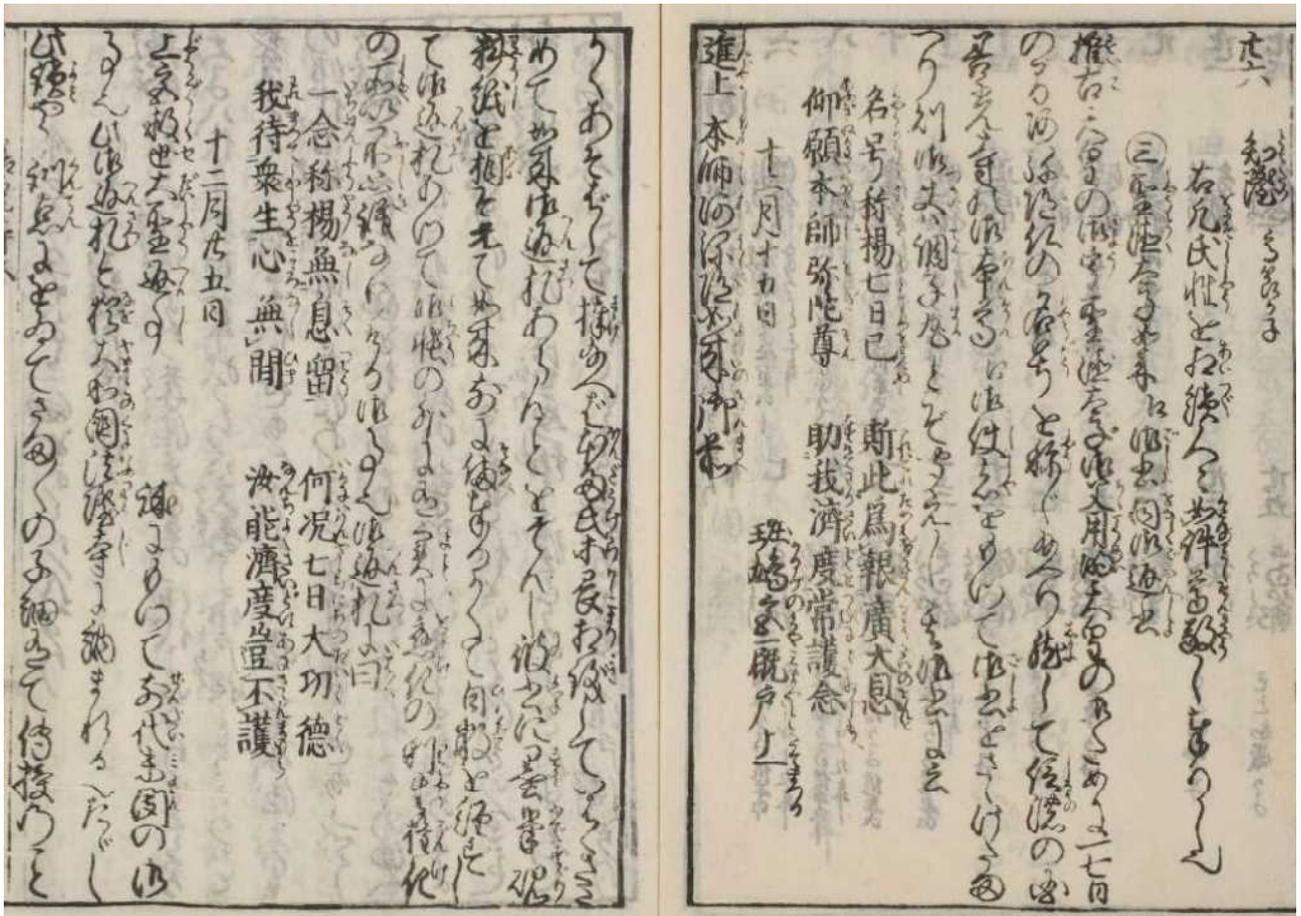
というのも、この手紙への善光の返事の日付が二月二十三日になっており、これにまた太子御返詠として「法興元辛巳十二月十五日」の歌があります。「辛巳」は621年ですから、時系列からして「命長七年」(646年)では次期の後先の辻褄が合わず、一方「丙子」(616年)であれば時系列の順番通りであり理解できます。

## 9 『善光寺縁起』(国文学研究資料館)

正木説では、善光寺縁起について『善光寺縁起集註』を採用されましたが、『善光寺縁起』(国文学研究資料館、120コマ)には次のとおり、同一の内容が記されているものの「命長七年丙子」の年号は記されず、日付は先の太子御返詠と同じです。

名号称揚七日已 斯此為報廣大恩 仰願本師弥陀尊 助我濟度常護念 十二月十五日 斑鳩宮廐戸上 進上 本師阿弥陀如来御前
---

始めに、阿弥陀の名号を称し揚げることを七日を終えるとあり『善光寺縁起集註』と同内容です。この手紙はその阿弥陀の広大な恩に報いる為として、願わくば本師の阿弥陀の尊さまに我を助け濟度を常に護念をしてほしいと願ったものです。



つまり、これは聖徳太子（斑鳩宮厩戸上）が阿弥陀の名号を七日間もの間、唱えて阿弥陀如来に救いを乞うた手紙です。内容はやはり「助我濟度」とあり聖徳太子が行う救済を助けるように願う手紙です。

『善光寺縁起集註』では1度目の手紙が「命長七年丙子二月十三日」であり、2度目の手紙が「法興三十一年辛巳（621年）十二月十五日」であり、3度目の手紙が「法興三十二年壬午歳（622年）二月十三日」の日付になっています。

『善光寺縁起集註』では1度目の手紙が「祖王欽明天皇の為」とあるのに対して『善光寺縁起』では「父用明天皇の為」となっており別の手紙であり、『善光寺縁起』の手紙の十二月十五日の日付が『善光寺縁起集註』の法興三十一年辛巳（621年）十二月十五日と一致することから、これは621年に阿弥陀如来に送った2度目の手紙と考えられます。

本来、これら手紙は、善光寺が所有しているはずですが、実は、善光寺には収められておらず、法隆寺が所有する「善光寺如来御書箱」の中に納められています。その理由は手紙が善光寺創建（642年）以前のことであったので、元善光寺（座光寺）に納められ、その後、聖徳太子ゆかりの手紙ということで法隆寺に収蔵されたのでしょう。

法隆寺の創建は、金堂に安置されている薬師如来像の光背銘や法隆寺伽藍縁起によると、用明天皇が自らの病氣平癒のため薬師像と寺塔の建立を発願しましたが果たすことなく逝去したため、推古天皇十五年(607)に、推古天皇と聖徳太子が本尊の薬師如来を造り法隆寺を創建したとされます。法隆寺の金堂安置の薬師如来坐像の後背には、薬師像を本尊として法隆寺を造立したという縁起が刻まれており、「父用明天皇の為」とする『善光寺縁起』（国文学研究資料館）の記述に合致します。

いずれにしても、利歌弥多弗利と斑鳩宮厩戸上の名の関連性はありませんし、利歌弥多弗利と聖徳太子との結びつきも希薄であり、かつ問題となった「命長七年」は、手紙の時系列からして年代に疑義がありますので、正木説は総じて無理があり妥当とは思えません。

# 疫病封じと津島神社

一宮市 畑田寿一

現在、世界中が新型コロナウイルスの蔓延で騒然としているが、古来から人類は疫病との闘いを続けてきた。

現在でもウイルスに対する有効な手段はないが、医学の発達していない古代においては、ただ神仏に祈る以外に方法は無かった。いろいろな神仏が祈願の対象になってきたが、最も多数の信者を集めた神仏に牛頭天王ごずてんのうがある。

愛知県尾張地方にある津島神社は、中世にはこの神仏を祀り、全国に3千社の分社をもつ一大勢力を誇った。

今回は津島神社を通じて中世の庶民がいかに疫病と戦ったかを眺めてみたい。

## 1 疫病発生 of 歴史

『日本書紀』に最初に登場する疫病は崇神天皇期で、はやり病により京の人口が半減した記述であろう。その原因を占ったところ、三種の神器を祀らずに石上神宮の倉庫に入れっぱなしにしていたことが原因とされ、鏡と劔を伊勢神宮と熱田神宮に移祀することになった。

奈良時代の疫病発生回数を『続日本紀』から数えた研究資料「奈良時代前後における疾病流行の研究（董科：関西大学2010）」に拠ると、100年間に50回程度発生しており、大流行（パンデミック）も11回発生している。

期間（西暦）	流行回数	大流行回数	計
697 - 716	25	2	27
717 - 736	1	1	2
737 - 756	2	2	4
757 - 776	8	4	12
777 - 791	2	2	4
計	38	11	49

更に800年代に入ると富士山の大爆発（800年、863年）、東北の大地震（869年）など天変地異が加わり、869年には厄除け祈願のための祇園祭りが始められる。877年に疫病が発生した際、祇園社の靈験により疫病が治まったとされており、この辺りから天王信仰が本格化したと考えられる。

## 2 牛頭天王

### (1) 牛頭天王のいわれ

仏教の創成期にインドで僧が修行を積む精舎の1つに祇園精舎があった。そこに牛頭栴檀ごずせんたん（ゴースールシャ・チャンダナ）の木が生えていた。この木は成長すれば香しいかおりがするが、幼木の間は香りがきつく疫病除けにもなり、祇園精舎の守り神とされていた。これがいつの間にか牛頭天王になったとされている。

## (2) 牛頭天王を祀る社

現在の神社	奈良時代の名前	牛頭天王を祀った時期など
広峰神社 (姫路市)	天王山増福寺	732年吉備真備創建。稲作の神？
八坂神社 (京都府)	祇園観慶寺感神院	829年、877年の流行時に活躍
津島神社 (津島市)	津島牛王天王社	810年頃？

上記の3社が特に有名であるが、いずれも前述のいわれを含めて起源は明確でない。広峰神社は現在でも八坂神社と創建争いを繰り返しているが、姫路市の調査によると本家争いは2転3転しており優劣が付け難い。その中で津島神社が頭を1つ上に出して勢力を広めた。

## (3) スサノオ命との結び付き

スサノオ命との結び付きを示す神話に「蘇民将来」の説話がある。

スサノオ命はある村で宿を探した。金持ちの兄（巨旦将来）の家で宿を乞うたが断られた。しかし、貧しい弟（蘇民将来）の家では快く宿を提供してくれた。後日、再度スサノオ命が現れ、「我はスサノオ命なり。今からこの村を滅ぼす。しかし、お前は私を泊めてくれたのでお前の一族は許す。目印に茅の輪を掛けよ。」と言った。

その後、正月には家々でしめ縄に「蘇民将来子孫」の札を付けるようになったとしている。

## 3 津島神社との結び付き

### (1) 津島神社の創建

現在の津島神社の海拔は0mである。護岸堤防が無かった古代では満潮時には1m以上水没する勘定になるが、これは昭和に入ってから地下水の汲み上げによるもので、津島市の東の端には弥生中期の遺跡が存在するなど、人が住める土地もあった。

津島神社の縁起に拠ると、起源は対馬から来ており、「津島社」と呼ばれていたとしている。津島神社の元宮は境内の南にある「居森社」で、ここにある「三つ石」の由来は不明とされているが磐座と思われる。また、南側の鳥居の脇にある石の配置も、対馬の和多津美神社の鳥居に似ており、あながち語呂合わせによる説話とは言えない。

### (2) 牛頭天王との結び付き

牛頭天王との結び付きははっきりしない。津島社の時代からスサノウ命を祀っていたため、八坂神社と同様に牛頭大王と結びつき、疫病封じの社として栄えたと思われる。神社の東の楼門は明らかに寺の山門であり、江戸時代には仏像が安置されていた。

その結果、中世では「津島牛頭天王社」として栄え、「津島信仰」と呼ばれていた。

### (3) 天王社繁栄の謎

他の2社に比べて3千社の分社を持つに至った謎は、津島が海洋交易の拠点であったことと、伊勢神宮に似た「御師（おし）」の制度を取り入れていたことに起因すると思われる。

「御師」は全国にネットワークを持ち、毎年お札の頒布、分祠した社での祭礼の実施と天王社への参詣時の旅行社の役割を果たしていた。庶民が参詣ツアーに参加する場合、最初にお金を支払うと、行く先々の宿屋の手配や急な病の場合の手当てなど、一切の面倒を見てくれる仕組みであった。

御師の元締めは太夫（たゆう）の名称を持ち、手下を数十名抱えており、彼らを全国に

派遣していた。

#### (4) 神仏分離制度

明治に入ると廃仏棄釈が起こり、無理やり神社に衣替えを強制された。特に庶民に人気のあった牛頭大王を祀る天王社は名前が天皇に通じるため、「今後、天王と名乗るな」と指摘される程であった。

その結果、天王社は「津島神社」と「宝寿院」など複数の寺に分割された。宝寿院は現在の津島神社の北東に隣接しており、現在は真言宗の寺であるが、天王社の跡が色濃く残っている。

### 5 民間の疫病対策

#### (1) 予防対策

- ① 正月のしめ縄に「蘇民将来子孫」と書いた札を付ける。  
前述の「蘇民将来」の説話によるもので日本全国に広まっている。
- ② 子供に赤い着物を着せる。  
話の発祥は明らかでないが、疫病神は赤色が嫌いであった。  
そこで子供に赤色の着物を着せ、雷神のお守りの「でんでん太鼓」を持たせた。
- ③ 天王社のお札を門先につける。  
毎年、御師が頒布するお札を買い求めて門先に貼った。  
なお、村々には津島神社が分祠されており、街では家の軒下に小さな祠を付けてお参りした。軒下の祠は「屋根神様」と呼ばれており、数は少なくなったが現在でも見ることができる。
- ④ 霊験あらたかと言われている神社仏閣にお参りをする。  
津島神社を始め、各地に疫病封じを売り物にする神社仏閣があった。  
一宮市では東海北陸道の本曾川インターチェンジの近くにある「白山社」が有名で、この神社は初代尾張徳川家の徳川義直の子を救ったことから尾張徳川家から深く崇敬された。  
信州国分寺八日堂では「蘇民将来のだるまのお守り」が有名で、縁日の1月8日には、全国から信者が参拝に訪れる。

#### (2) 発生時の対策

- ① 村境を封鎖する。  
疫病は街道伝いにやって来ると考えられていた。疫病の代表である天然痘は接触伝染が主であり、人の移動によることが多いため、この認識は正しかったと言える。村や国の境には牛頭天王祀る祠や地藏尊などを配置して疫病除けとするとともに、流行時には人の往来を規制した。現在のロックダウンに通じるものがある。
- ② 養生訓に従い食べ物に気を付ける。  
737年(天平9)の流行に際して朝廷から次の注意書きがだされている。
  - ・生水を飲ませてはならない。
  - ・体を温める。
  - ・粥や重湯は可。鮮魚、肉、生野菜は不可。
  - ・海藻や塩を口に含ませる。
  - ・病が癒えた後は、火を通した物を食べさせる。蘇(チーズ)や蜜が良い。現代の医学からみても理に適った部分があり、対処療法としては正しかった。

### ③ お祓いをする。

やはり、この方法がメインであり、朝廷を始め民間でも各所でお祓いがされた。当時は疫病は疫病神が引き起こすと考えられており、政争で敗れた者たちの供養も盛んに行われ、天皇自ら鎮静のために大般若経を奉納するなど、あらゆる手段が採られた。そして、偶然にも効果が認められると瞬く間に巷間に伝わり、該当の神社仏閣は繁栄を極めることになった。

## 6 まとめ

牛頭大王が祀られたと思われる8、9世紀の世相を眺めてきたが、この時代の疫病は天然痘が主で、朝鮮半島から伝染してくるものが多かった。天平9年（737年）の流行は遣唐使が原因とされており、735年に多治比広成らが帰国後、大宰府に広がり、その後、畿内、東国に広まっていった。その結果、総人口の25～35%が罹患したとされている。相次ぐ疫病の発生により、8世紀の人口は100万人ほど減少した。

この時代は朝廷でも後継者が次々と疫病に罹って後継者難に陥り、繋ぎの女性天皇が多く登場した。疫病は中央政権の豪族にも襲いかかり、専横を極めた藤原四兄弟も揃って他界するなど、政治体制の激変期でもあった。

伊勢神宮系の神社が拡大する中で、古来からスサノオ命を祀る神社が牛頭天王信仰と結びつき、民の不安に応える形で急激に勢力を伸ばした。不思議なことに伊勢や志摩地方では正月のしめ縄に「蘇民将来之子孫」や「笑門」と書いたお札を付ける。伊勢神宮にしめ縄を飾る習慣がないことにも起因するが、庶民にとっては伊勢神宮を祀るより疫病封じの方が切実な問題であった。

津島天王社の起源は史料からは12世紀以前には遡れない。しかし、8、9世紀の疫病の蔓延状況からみて、この時代には津島天王社は成立していたと思われる。伊勢に近い場所の利と海運ネットワークなどの既存のインフラに恵まれていた結果、庶民の熱い期待に応える形で3千社に及ぶ神社の総本山に成長したと考えられる。

## 禊ぎ

名古屋市 石田泉城

日本は、SARSの経験がなかったため、台湾や韓国に比べて疫病対策の基盤が整っていませんでしたが、それでも都市封鎖をせずに疫病を収束させました。

コロナの患者が日本において少ない理由がいくつか推測されており、その一つに日本人の清潔好きがあると言われます。家に上がるときは靴を脱ぎ室内に外の汚れを持ち込みませんし、食事ではその都度割り箸を使い捨てる習慣があります。それぞれ何気なく行っている習慣が疫病対策になっているようです。

特に重要なことは、西欧人に比べて日本人は手をよく洗い、毎日入浴し身体を洗うことです。こうした習慣は、清めの儀式である「禊ぎ」から生まれたのかもしれませんが。

ご承知のとおり「禊ぎ」は日本神話にあります。

伊邪那岐命（イザナギ）・伊邪那美命（イザナミ）の神は、自らが造ったオノゴロ島（古田武彦説：能古島）に降ります。二神は結婚して最初の子・ヒルコは不具の子で、次の子・アワシマも正しく生まれてこなかったため、改めて正しく交わり、生み出したのが淡道之穂之狭別島でした。その後もさまざまな神々を生み出します。

ところが、イザナミは火神・カグツチを産み出す際に大火傷を負ってしまい、この世を去ってしまいます。残されたイザナギは亡きイザナミに会いたいと黄泉国へ赴きます。

イザナギは妻イザナミとの約束を破って、腐敗して蛆にたかられたイザナミの姿を見てしまい、その姿を恐れてイザナギは逃げ出します。追いかけてきたイザナミを振り切り黄泉国との境の黄泉比良坂を大岩で塞ぎます。

その後、イザナギは黄泉国の穢れを落とすために「筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原」（小戸大神宮の辺りと推測）で禊ぎを行なうと様々な神が生まれます。

このときの禊ぎは、単に身体の汚れだけでなく、観念的な汚れである心の汚れを落とすもので、顔を洗うと、左眼から天照大御神、右眼から月読命、鼻から建速須佐之男命の三貴子が生まれます。

このイザナギが黄泉国で被った穢れを祓うために禊ぎを行ったのが、神社をお参りする際の「手水」に変化したのだと思います。

神社に参拝する前には、作法の一番目ともいべき「手水」により心身の浄化をします。本来は全身を清めるのを簡略化したものです。また、家庭における毎日の入浴そのものが日本人の文化になっており、いかに日本人が清潔好きかは神話から繋がっているのだと思います。

この自然と生活にしみこんだ日本人の清潔の観念が疫病に打ち勝つ要素の一つであったに違いありません。

それは西欧や中国の衛生観念と比べればよくわかることです。

西欧人の多くは日本人と違って手を洗うことも入浴することも頻繁に行う習慣がありません。また中国人はトイレを拭いた雑巾で洗面のコップを拭くことに違和感がないようです。このように日本人の衛生観念が西欧などとは異なることが、ウイルスの感染に影響したのではないかと思われま

### 前回の例会の内容

2020年5月29日開催予定の例会は、武漢ウイルスの影響で4月の例会に引き続き、中止となりました。予定項目は次のとおり。

- 34年遡上説の功罪 その1  
名古屋市 石田泉城
- 伊勢志摩神島と海洋交易  
一宮市 畑田寿一

### 会員の投稿について

- 会報誌への投稿（編集担当：石田）  
furutashigaku\_tokai@yahoo.co.jp
- 投稿締切り日 6月26日(金)

### お知らせ

「東海の古代」235号（令和2年3月）「『正和四年卯月五日』について(2)」、「6-②」を除いて「真野長者」は「真名長者」の誤り。

次回の6月例会は、開催します。

### 例会の予定

#### ■ 例会の予定

- 1 日時 6月14日(日)13時半～(第1集会室)
- 2 場所 名古屋市市政資料館  
名古屋市東区白壁1-3、TEL052-953-0051
- 3 参加料 500円（会員は不要）
- 4 交通機関
  - (1) 地下鉄名城線「市役所」、東徒歩8分
  - (2) 名鉄瀬戸線「東大手」、南徒歩5分
  - (3) 市バス「市政資料館南」、北徒歩5分
  - (4) 市バス「清水口」、南西徒歩8分
  - (5) 市バス「市役所」、東徒歩8分
- 5 駐車場 市政資料館：12台+α収容(無料)

#### ■ 来月以降の例会

7月以降の予定は近日お知らせします。  
7月例会は総会を同時開催します。

古田武彦先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。  
事前の参加連絡不要。例会で発表される場合には、資料25部を用意ください。

